

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(62) 平成15年1月1日

江戸時代の国学(その4)

『古事記伝』(213/46)

本居宣長^{もとおりのりなが}(享保15(1730)年-享和元(1801)年)は、伊勢国松阪(三重県松阪市)に生まれ、そこで一生を過ごした国学者です。松阪は、城下町でありながら商業都市として栄えており、宣長も商家に生まれましたが、家産は傾き、医者になるため京都に遊学することになります。京都では医学とともに、儒学と和学(和歌)を学び、帰郷して医者(小児科)を営む一方、『源氏物語』を中心に国学を研究します。宝暦13(1763)年、大和旅行の途中で松阪に立ち寄った賀茂真淵に面会し、翌明和元(1764)年に正式に入門しました。そして、同年『古事記伝』に着手します。(明和4年着手とする説もあります。)

『古事記伝』は、全44巻からなる大部の著作で、すべてを脱稿したのが寛政10(1798)年、69歳の時ですから、宣長の全生涯をかけた一大事業といえます。

1之巻は、古事記と日本書紀との比較、古事記の文体、かな(万葉仮名)、訓読について解説し、そして最終章「直毘靈」^{なほびのみたま}で儒教、仏教に比べて、日本の古道が優れていることを主張します。この部分は明和8(1771)年に先行して出版され、宣長の国学者としての立場を明示したといえるものです。2之巻は『古事記』序文と系図について書かれ、3之巻から『古事記』本文の注釈となります。

『古事記伝』の刊行にあたって、宣長は自費で出版する計画でしたが、なかなか進まなかったため、門人であった尾張藩家老、横井千秋が見かねて資金を提供し刊行を促進しました。千秋は、板下を宣長自身が書くように求めましたが、宣長は長男春庭(1763~1828)に書かせました。春庭は天明7(1787)年から板下の執筆に取りかかりましたが、その重責のためか途中で眼病にかかり、失明してしまいます。そこで宣長は、板下を自書したり、あるいは次女的美濃や門人たちに書かせます。結局、宣長存命中に刊行できたのは、第1~3巻17巻まででした。その後、享和3(1803)年と思われる第4巻から文政5(1822)年の第8巻までが順次刊行されました。

当館所蔵の資料は、天保15(1844)年に初版と同じ名古屋の永楽堂が再校、刊行したものです。これには、紀州藩主徳川治宝^{はるとみ}(1771~1853)の題字と宣長の養嗣子本居大平^{もとおりのあひら}(1756~1833)が出版経緯をまとめた「御題字能後爾記須詞」^{ごだいじのしりえにしるすことば}が収められた首巻が付いています。

『古事記伝』は、宣長が最高至上の古典であると信じる『古事記』の厳密な注釈であるばかりか、古学・古道のいわば百科全書であり、宣長の思想・学問の精髓は、ここに結集されているといえます。

(参考文献)

『本居宣長全集第9巻』(121.2/142)

『本居宣長』城福勇(281.08/101)